



諸本太閤記

五編

五

特
 伊13
 1883
 53



門へ18 特
流 1833
巻 第3



繪本左圖記五篇卷五

目録

毛受勝助討死の事

毛受勝助の馬をど場

茶臼山と徳と玄歌と行國

秀乃若御百性名よきとて有るを救ひ給國

毛受勝助勇戦討死の圖

勝助列府中若別多永活

柴田勝家湯漬を乞ふ圖

勝家龍小居城活

秀吉御の伏兵、先久間を破れ、生捕る國
水の底の機と罠心圖

文荷、母、其、想、子、乃、死、入、を、碎、く、圖

柴田、勝、家、三、人、の、女、を、秀、吉、に、送、る、圖

勝家、自、害、之、後

勝家、其、婦、拜、世、乃、和、考、と、詠、む、る、圖

上村、一、九、勝、門、自、害、之、後

山、原、為、城、と、見、る、未、成、母、子、自、害、の、圖

赤、嶽、勲、功、之、由、士、勿、失、其、活、細、江、を、破、れ、る、圖

侍、從、信、者、自、害、之、後、内、圖

繪本左圖記五篇卷之五

毛受勝助討記

小園の惣大、柴田、匠、作、勝、家、の、廿、一、日、の、又、釣、狐、塚、ま、を、軍、勢、と、押

出、陣、と、張、て、味、方、の、安、危、と、伺、ふ、に、落、武、者、追、く、馳、走、り、後

が、嶽、乃、合、戦、味、方、勢、崩、し、に、放、陣、と、言、番、隊、の、生、死、を、言、ふ、に、と

若、く、し、が、熱、軍、と、瓜、分、し、又、ぬ、け、く、よ、落、ち、て、七、千、余、騎、を、中、へ

一、軍、勢、も、今、の、三、子、に、し、は、是、が、り、つ、る、勝、家、怒、れ、る、眼、と、血、を、そ、く

ぎ、情、也、と、言、番、隊、が、吾、等、知、と、言、ひ、泣、く、て、形、る、故、小、及、び、つ、る

條、る、く、天、令、乃、志、し、む、る、を、今、の、悔、も、く、し、を、甲、斐、は、と、言、ふ

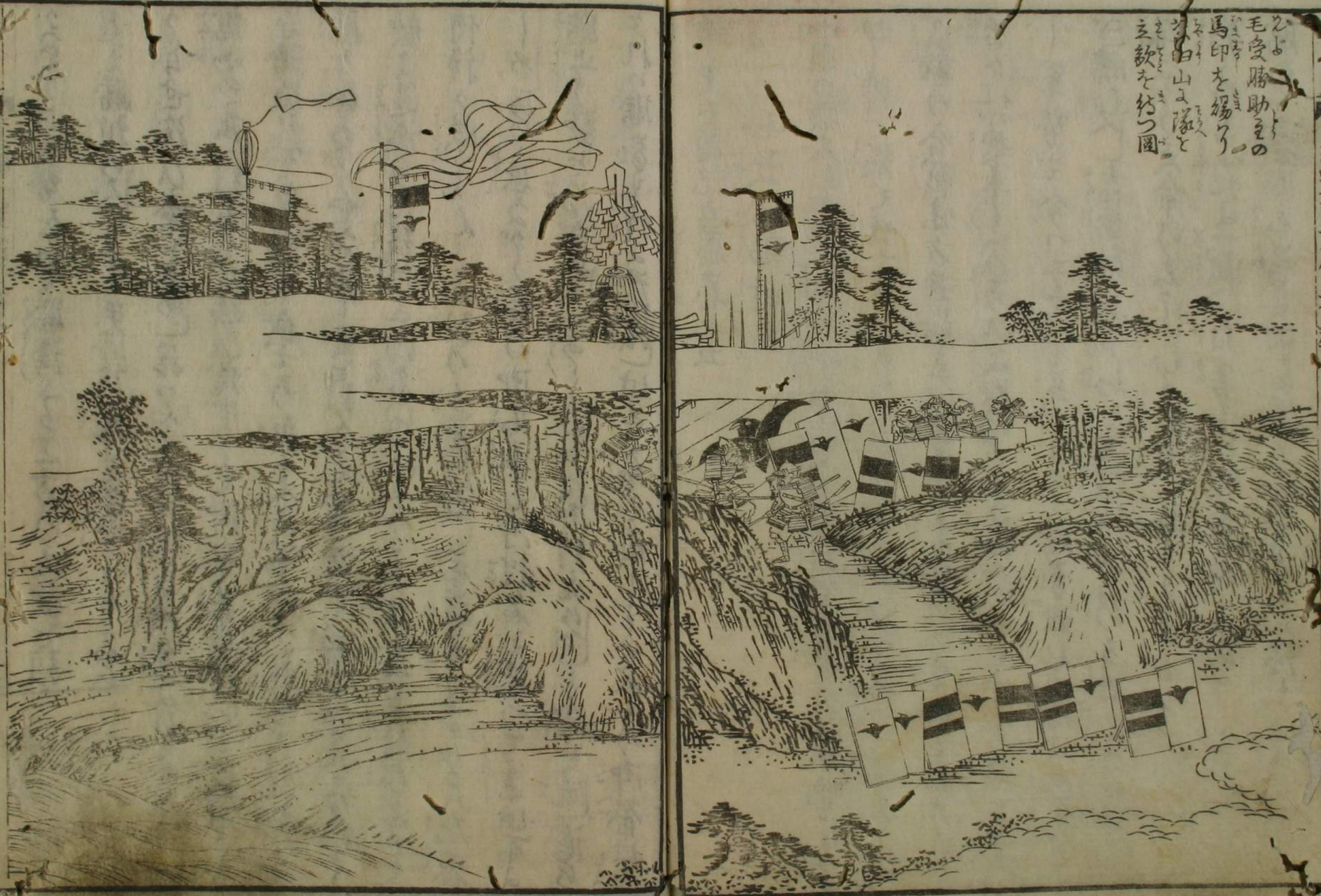
待、り、け、声、た、よ、一、戦、自、害、也、と、軍、乃、を、破、り、せ、り、と、言、ふ、を

勝、家、の、勇、將、毛、受、勝、助、の、照、と、と、物、く、こ、の、情、も、是、へ、ぬ、し、の

勝、家、の、勇、將、毛、受、勝、助、の、照、と、と、物、く、こ、の、情、も、是、へ、ぬ、し、の



毛受勝助の
馬印を揚り
白山と
敵を待つ



る今計小勢を以て勝誘するところの大敵と引つけつ小敵と
 とも勝利ありしとも是れは偏る途中こそ各所の匹士の被り
 くらせ給ひ命と渡し給へんとは口惜き次第の急ぎ河原
 越山の庄へ引寄せ給ひ戦中こそ御自害少くはしと傳へるに
 大勝家政をおろし武士乃死すべき事あり死せざれば死す
 勝る死ありやま申度と引合せて山の庄へ引つけ給へるに
 敵も退治らる後代と汚名は残さんより只定めて討死せんを
 何程か候へんと取引の事更には毛受をてやうら龍思
 しゆゆり恐るがう君乃御馬車と御姓名と賜つて系はるに
 踏止り敵と防ぎ給へしあはれ御引合はしと涙と流し傳へ
 されし勝家も仰々流涙しけしと危し角もとて今乃御幣は馬

手と勝助にありし士衆と引合し山の庄へそ流らるるに毛受勝家
 今心屬しと之無威の獲多くと扱ふは足袋先湯門耐無系と始と
 討死とまじうる武士二百余人十町余り引退き茶臼山の林に
 彼金幣乃御馬印と押さく敵と逐し給へるに去程より上方勢
 を御が嶽を向ふやうに迎ると退て進もつるが大御方の諸方
 の軍後を馳し勝家の武功秀なる兵方るぞ切りに傳へる
 へつて防ぐべき味方傳へると進むと退く下知と傳
 へ給へる諸士の御軍実しとやあひえ面も勢を引まどら流
 と固め静しと押して御叔も夕那より此合戦もあ方の死人を真
 義の中へお殺をまじ打撃つて却りたりたり日におくはしのわり
 日月廿日己冠りかろふ一息の雲もなく日光輝しく照る後



秀吉御百勝の笠
をてて負ふ
萩の冷人園

跡にその日執りしういふ願ふも落しと喚き用ひて難きが
 を赤の若石候より跡い何とるも傍とまろと見給ふ遠村道
 里の百姓も老若男女並引ぐるき山の本乃ら小尺寸の地も余
 されいづくとまかりひ見物してぞ居たりたる赤の若石の
 こころはまろく士年い冷し汝等が並とまろくけ方後長しを代
 して後日又獲取と給りけりまろく悉く並とまろくをい
 形も存る願ふは又あつたせ日後よせせりまろく附は茶向山の林
 一む松石清け中に金幣乃馬車押立勢の預三百計整へし
 まろく扱入り系勢とまろくをいまろくを柴田よ勝取方ろぞ我討
 しまろくをいおに休人と團きろろが本中九藩門百八十騎人よま
 守とまろくしと團と時と他門と討てろろ松原乃本藩より彼

金幣乃馬車とまろく指と毛受勝助ま先に馬とろけ出り大言ひ
 鳴りろろい一方乃軍勢大化はまけ出附日本にまろく名取得しは
 柴田勝家武運秀より今討死と遂ろぞ我とまろく若とまろく
 よまろくやまろくをいんとまろくまろくまろく入まろくまろく
 本中が勢もまろく本の系乃教候しと扱と一度は逃散り
 本中亦九藩門にまろく若とまろくとまろく槍とまろく勝助を目掛け突来るを
 何ういふまろくしれ勢もまろく長刀と電光のまろくお振て廻り用き我いまろく本
 中九藩門膝の四よりまろく取けて薙中ら馬より中ら落さる勝助の本
 中若とまろくまろく而乃まろくまろく引上げ隊をまろく扱入り入替つて小川
 守五百余人圍を他門と斬てろろと毛受勝助陣取馬とまろく
 来る若の小川とまろくまろくはまろく元佐も本藩代のおまろくまろく信長



毛受 助 勇 義 討 死 の 國

真 顯 証 五 卷 五

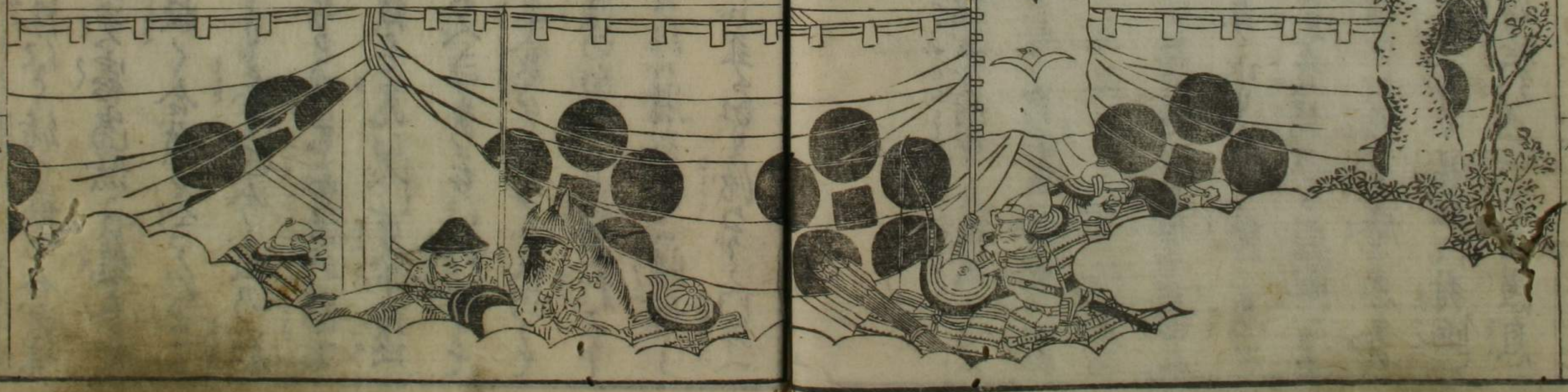
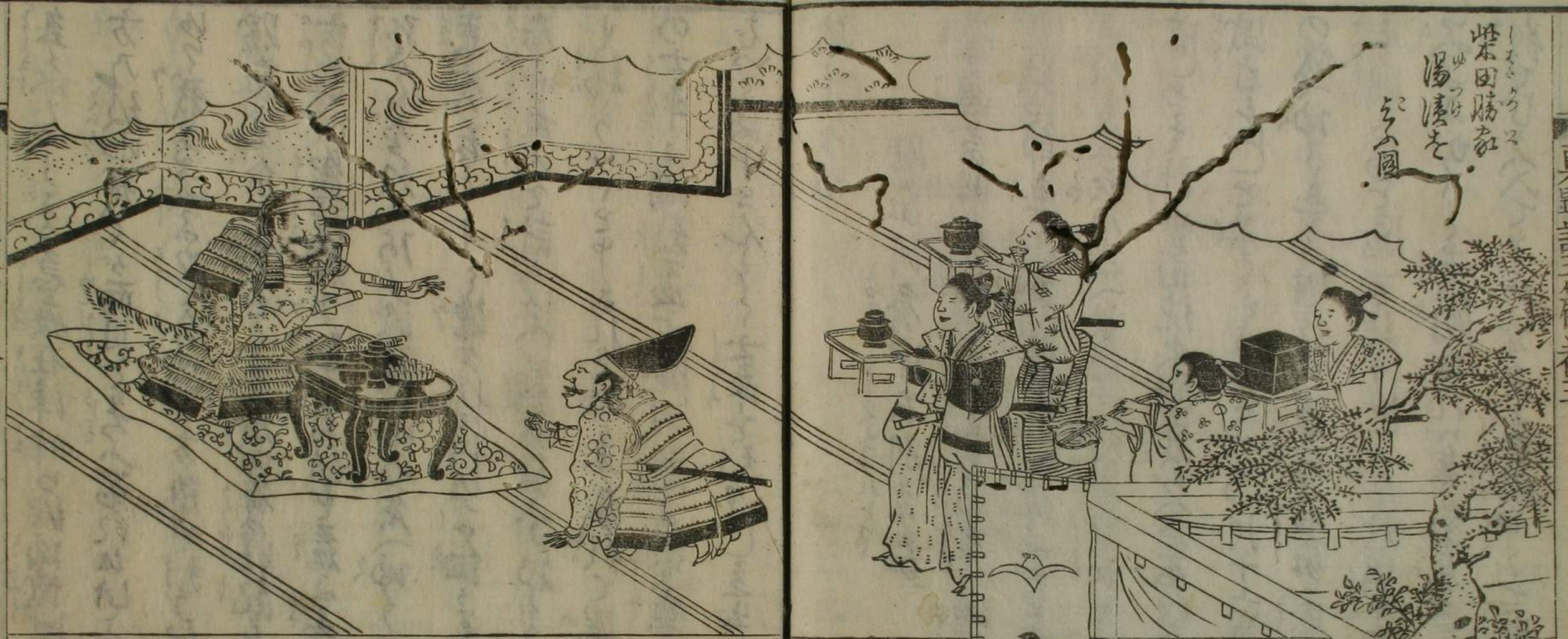
一 六

乃幕下又属一信長討之... 後明智光秀に後ひ先... 秀吉の阿部... 物見せん... 小川が軍務粉粒と... 是を月... 進む... 毛交り... 軍務... かくと款と巴の字... 討死せし... 友路の... 消る...

勝江利府中告別多敷

摩惠多政左衛門尉多敷... 息孫に即家永柳... 又敷多世... 諸... 滅... 之... 其... 父... 於て...

此本因勝家
湯漬を
紀の國



年承えうらうら急候在津叶り比海城也迄に續山嶽中我時
方乃故水預くが面目と先ん石にひけとい美富出城は籠らよ
ゆり我多るより力と合せ上方勢と引け候く合戦と云きんひこ
勝家完介と名ふく美友の原信記ととも志込今度の戦
云番改盤政我下知を用ひど茲よむらうりそお運の感不
難くならぬらう比我の石居一戦を免む也是下以後
素素の者とりて源これ何の子細もそあふき素素の者に流吹して
お名長久を計らひに相勝ぬ今知より素食のをるるは何と
も場らばとやされんが多家に於て湯漬の白飯を進め候と申
の士率の酒教書と居り懇々郷食應に及んが勝家大に懐ひさ
むつと候中せんとも士率と引合し三知れが多家に候はる門外

送り出はよ各跡を懐と山の石へと急うきたる枕をぬに羽柴統
元守素の右の毛受足分を討て申に大軍と引陣し城を後向
そ日い今迄と云ふ不の宿陣せしと相違廿二日又船迫士加着虎之助
福徳市松西人計と比は是軍勢の態と本陣と跡し是府中の
城は城は好い門をより大受とて政たしく素素をたまて来りよ
門を用き對面らしと宣ひ多家をそとびく大きに致され矣食より
伺ひしに素素の者後兵三人用き乃津平よりくまの素泡を素
と下打解する被替を門外より居るの政に湯門急ぎ門外へ出
るをきてと應は信じ扱し合戦のあひといやうつぐ味方の軍
率一戦は好い也といひうらうら今今の對面は面目なき次分よは
この御意に於いて樂くは害仕かりんとやされなきは素の者大

又笑いこい余はくましき摩惠多氏のや糸くらん中と柔い若者の
若より元月睦後元来美友の心後柔よりそとまより今一具の若
よよの味方名をまよとて武士乃出にて路くくは
若の樹別眼もいほし秀吉も又足中は跡まの系毛路をれば
柴田滅この後天下の大小事何よりい偏はれおるなり
相まに志とせよくに海陸溢の大功をまがたんと余然も
く日久治の美友も大よよりいれく酒盃をともめく羽柴乃
幕下より属せしとぬ

勝家籠山居城

客の仇久間云番匠望政の徳ヶ嶽とて秀吉の本陣(斬へく既
大ねん討入りして天授の秀吉を番匠眼くくと進寄りの徳に

あく牙を歯で退き多るが格上勝久は出合はぬ敦賀の方を
志するもさき山中で居るが何とま望政が武運も後よ
番匠くくよりや戦場とて討死とてさき牙乃押しく居る
くこそははし多廿一日の申討計よあ人もよ飢よ腹
て一足し歩も難く衆の實とてとれを食し(まよもをを
ははたぐりなり小明智の秀吉若くあんと通てまよも
くや美濃城を若徳の山途よ悉く兵と伏せ居人と捕
め後云番匠くくことまよもは(て本ら出くくは彼依
兵二日よん然ら道は(とまよも心望政鬼津も歎く別勇
るれども世後より食後と心牙も旁に働くも叶ひがく
二三人の切捨れども後よまよももの若く二人も生捕り

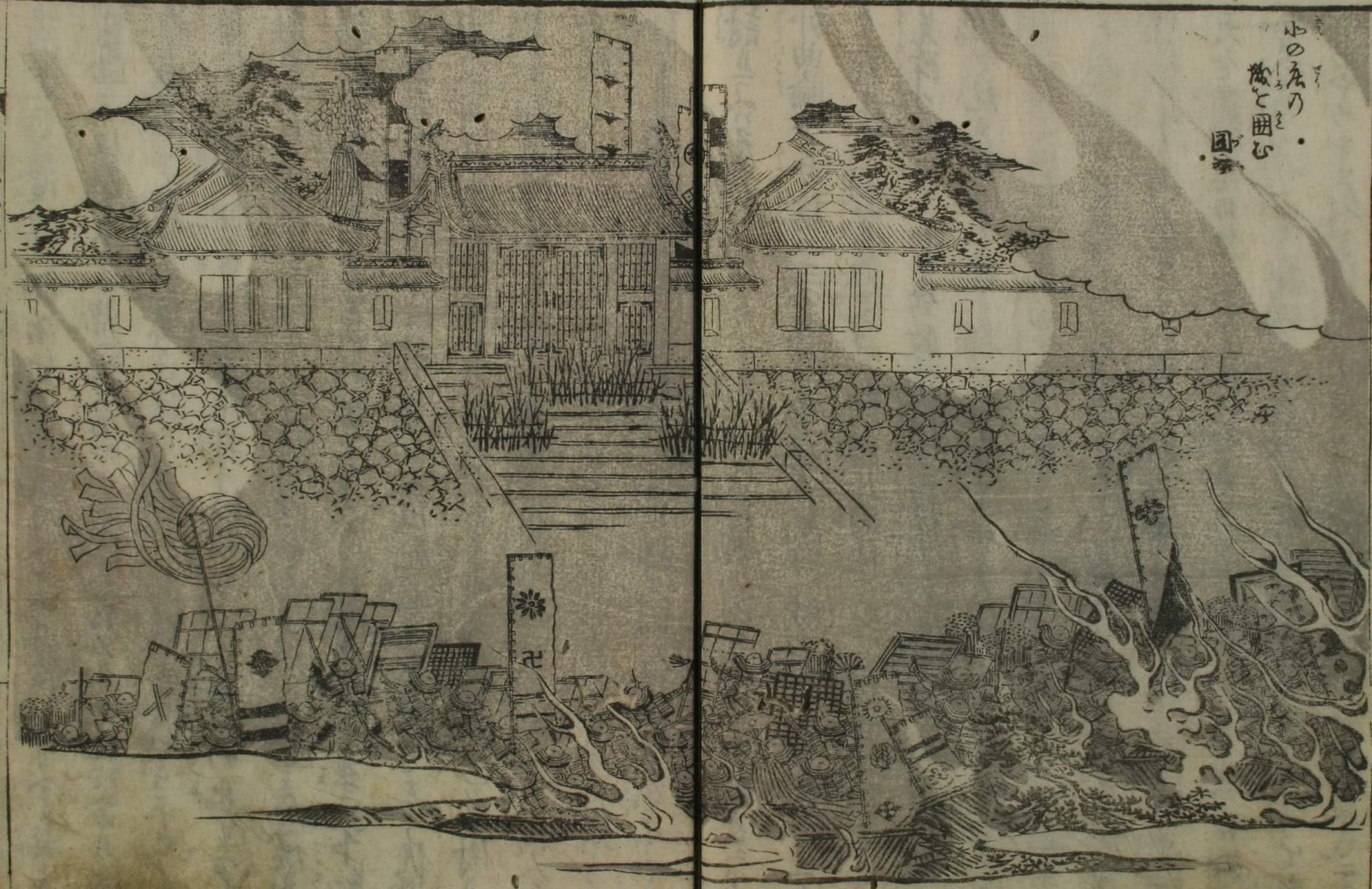
秀吉の
伏兵
佐久間玄蕃次
を生捕る圖



秀吉の平陣（引）と云る去程、柴田、近江勝家、其日の美濃、
 水の原（山）に、秀吉の軍、柴田、近江勝家の軍と、
 其の志を必死と云い、籠る者、中村文利、其日の美濃、
 門前、小幡若狭守、柴田、近江勝門、松本、其又兵、清水、長右衛門、
 松浦、九兵衛、佐之助、其の中、小幡若狭守、其の嫡子、新、其即
 ま、け、以、て、其、病、は、後、れ、に、籠、り、て、居、る、に、ご、う、と、他、は、籠、城、
 若懸（殿）も、其、人、と、專、に、助け、あ、せ、り、と、城、中、へ、入、る、が、大、女、の
 門、の、前、へ、自、守、と、云、て、書、付、つ、る、を、文、と、曰、

小島若狭守男新五郎十八歳因病死、其柳濃表雖不出張、
 今籠城而全忠義者也

と大女、其、書、付、く、城、内、へ、入、る、は、勝、家、が、後、心、乃、勇、士、等、其、
 討、つ、る、為、に、其、城、を、守、る、人、き、士、卒、の、多、く、
 外、曲、論、を、お、拾、三、三、の、丸、乃、勢、破、り、と、は、款、の、あ、る、と、信、居、り、
 う、其、不、に、羽、柴、流、不、守、秀、吉、に、府、中、より、水、の、原、に、押、寄、り、
 先、陣、の、陣、体、を、即、秀、吉、政、次、に、信、を、其、城、若、乃、番、の、決、計、を、ま、り、せ、
 別、を、其、城、と、云、き、押、て、其、城、と、路、上、の、氏、家、を、悉、く、放、火、し、て、
 進、む、程、は、け、田、の、老、女、西、女、西、女、と、云、い、ま、す、と、い、ふ、事、を、其、城、
 其、秀、吉、乃、軍、勢、水、の、原、に、着、く、程、に、城、を、十、年、二十、年、以、て、圍、
 其、城、の、道、り、の、人、家、も、其、火、を、放、ち、一、度、は、焼、く、と、焼、き、ぬ、き、い、い、煙、
 天、を、覆、ひ、白、日、忽、然、を、失、ひ、暗、夜、乃、ど、り、ぬ、け、り、秀、吉、御、前、
 美、濃、山、に、お、り、り、款、城、を、見、積、り、其、人、は、煙、を、見、ま、り、て、物、
 の、何、や、り、り、人、を、以、て、以、て、士、卒、を、其、城、に、引、け、煙、の、中、に、其、人、



水の流る
激で囲心
回

真言宗五輪巻五

真言宗五輪巻五

十三

諸勢一日之澄隙へ押合竹箒と附てたむらふにせしかきく抱音
せぬ中うにひそめく隙へ押合やと敵委出さるにに方乃諸
率我密じと竹箒と密き捕と並或い部より戸つとせく
難くへ隙へ押合る付西風頻りに吹出く余煙の束とせく
敵矢これ隙中をせりて大きに移さこいふと強きまに勝家
馳あつて急な毛とをまけり敵とちうくと引うけて士率以下
弓發炮と雨のどくに放ちうくまは死勝乃者敵とをり隙
ふたふのちうる軍令りりれをねりてと軍令ふ感じたる時且
多勲兵捕はるる後率を番隊を政授六郎勝久乃兩人を
生捕さうとて本陣へ引来りしうを右佐佐木頼朝りりやぞ
副田甚元勝門口甚兵衛と死に長終ふ兩人情あつ武まうと

とましく勞りり懸あたるに政勝久と海と感し守る乃
幸中るるを怪ひたる翌日二十三日秀吉の命を受け政
勝久と城外へ引出り士率九百と柴田及乃子息授六郎勝
久間を番隊をね疾に捕とれぞや元勝久とて一日は晴と
多やうへ隙中これと力と落し頼りうへく看せせれ大
の勝家の死よ否は害の時こそ来れと主君信長より辭死
しうるまをれを密とせと廣間より書院の間に悉く飾と立
しうるふ世の人の常と目るれぬ後乃玉うるはしき繡輝の
くろ御放代乃墨跡文とれる繪を外刀御樂器乃敷る向るく
盛としうる若殿のま竜田乃秋とかりて見る心地にたる其中
甚利と号し書儀乃花入り勝家とびうとせし中村文荷女に白

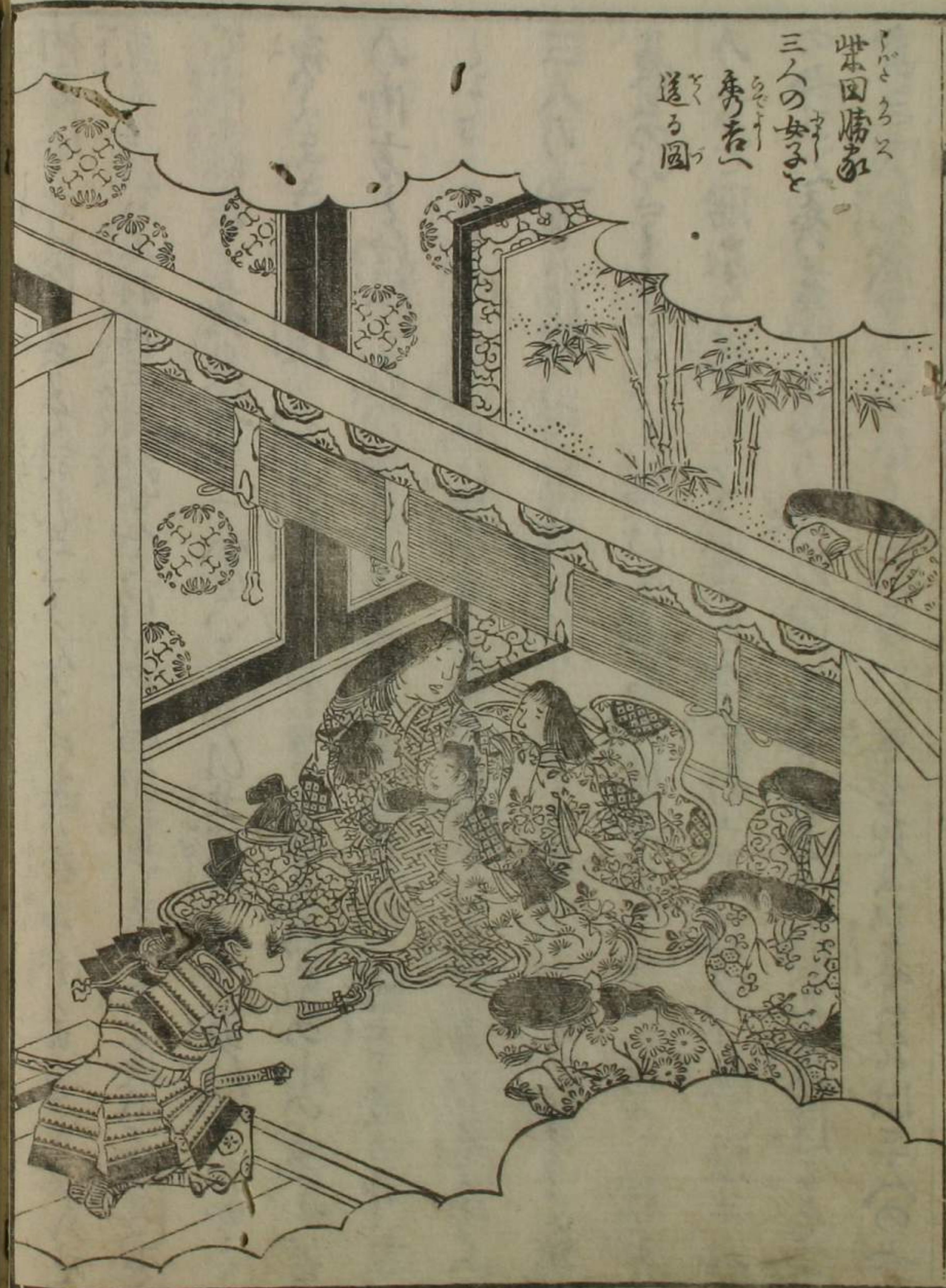
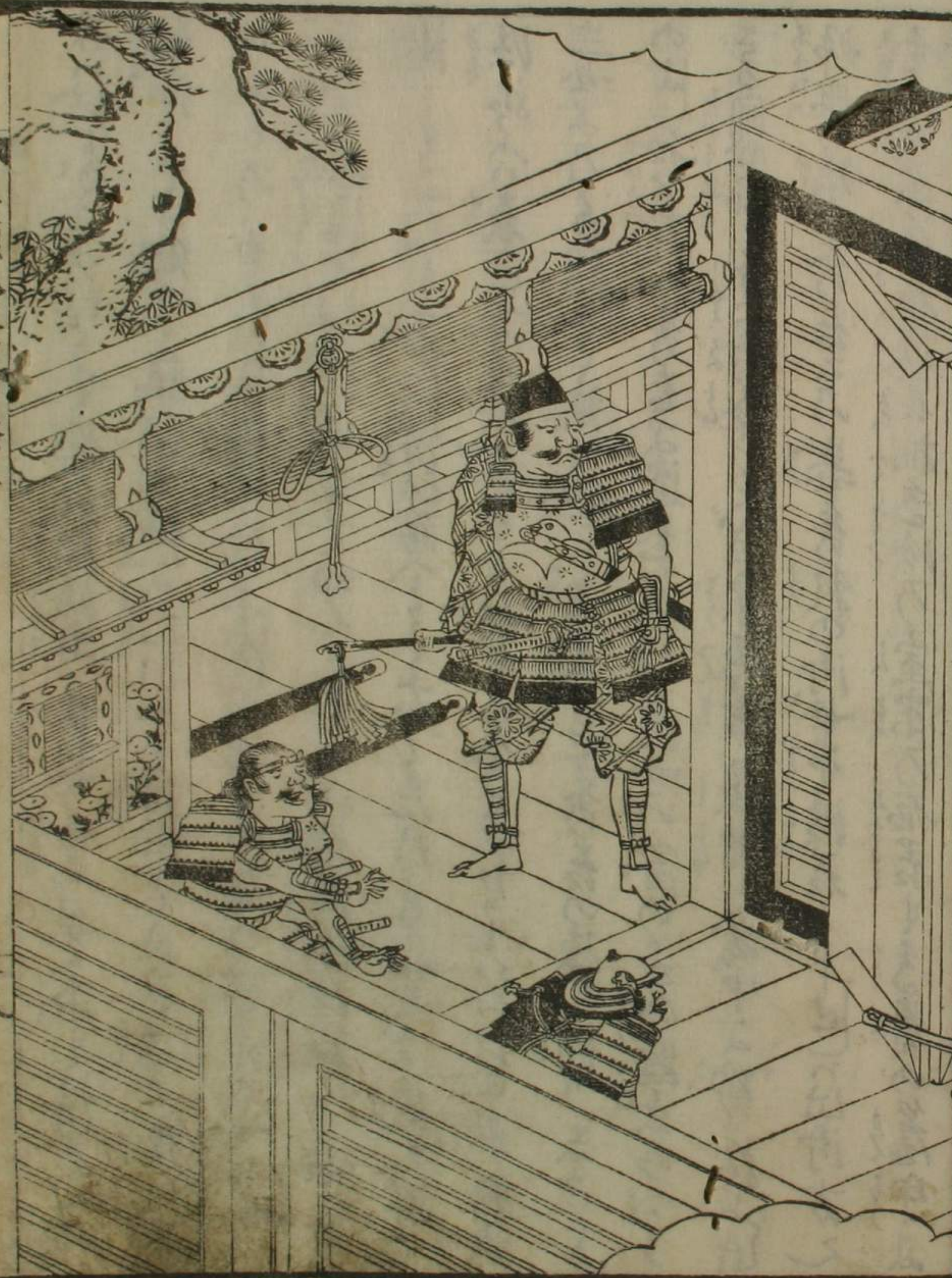


文荷
の花入
と破
國

貞
五
卷
五

ちやう侍まけ花入信長云「誰と誰」給言名をたつ我は場入時
 大國をふるより大切な扱ひはし受懸をりけさせし
 場ひより花入なり我はき流りかきちりしとくも人々は
 扱ひよきぬて座を立つるが忽ち乃に相出徴座は碑と
 捨つるは勝家これを見んぬ我は我は受懸と死せらるる
 乃酒宴始しとく日の暮進き以より擲く後あく
 酒着と送り勝家の天守より女は酒をせせり酒宴と
 一々の勝家が功臣と村に九勝門射り又自害とあひ定し
 惟よと「大ぬるそむれぬ心よく酒と飲む勝家の地と
 といひつるあやいふと村勝家が今の期は及んで我を
 くれりこそむれ我婦末森及親とといふ見し助けしは
 討死してこよひの内は城と扱ひ

何方に悲憤し安て討死せし人より余が幸をたつと
 急をなれい上村再三討死せしつるは勝家曾て是を免
 せしにけし力とて末森及と其息女を二人をいさちし其
 席より取にらるゆゑ疾よまきれと推が谷乃奥へ
 逃れり多室は勝家の小の方小谷乃御方と
 候し故信長云の妹君と其名を於市及の御方と
 してやらる始り後其後守長政は嫁して三女一男と
 養ひ給ふ三人の女は後其後之の後於市の方と仰よ
 小回おれ海うて信長云のつらうとけく扱ひ
 三流よを後三人の女と付て於市乃方と勝家
 乃揚子と勝家乃揚子と勝家乃永新六を後者
 乃揚子は三人の女と養ひ給ふ方と送り
 養ひ給ふとて其口上は勝家乃運とてよ
 盡き明知中にて扱ひし生害は遂に
 死すにまよ付し三人の女



柴田勝家
三人の女と
秀吉
送る圖

真界三十三卷三

其の勝おぼろにほくしゆらば故清舟長政が女より余は信長云乃
因縁しては城中を毎ひく候よこひしは候方くはれ送り候まひ
らるる乃るるた又痛う送らばと乃事より富永委細承り
三人の娘達と引合し城中と出んとする小娘若達は悲しと母と
満くしよはくするに候ひ送るとく右とた乃もにどがう候ひ外て
浮送るい表とさる次方より却てあききめたり候富永新六
三女よりも瓜をく強て薬よ系系とせ秀吉の陣より引り去り
のほお置れは秀吉と陣をて候三女乃乃の上柳藤まゝに
さる同心安くは宮遂らるべき系返送し候者と城中より候はけ
姉妹後より秀吉云乃委秀吉の御母を候君と申せはけ御方之
を次い系極若極宰相さ次乃室末の娘若もる貴の屋中より

勝おぼ自害

侍り候ひ何事とてじく是れ給ふは則勝おぼ志之たり
去りては勝おぼ心の方と始り小幡若狭守中村文利毎より乃勇
士と集り宵より酒宴と候舞川流ひつ指の碎を地よ此世はと
と忘れりりおぼも勝おぼ生害の者はへられは攻めくと守るの
あく弓矢炮と止め責討りせざるに候城中候く碎と置し置
納めるとする小三夜乃月よりくはよ了郭云二夢三夢守事
よ言つてはこれ小谷の方候と候よ折見申りて
更におおぬる程は其の夜乃別は瓜とそくわくぎんは那
はへたる小勝おぼ守ををえとく
其の夜乃愛路墓るは流りる瓜雲舟に揚よ山時を

勝家と文荷母子群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

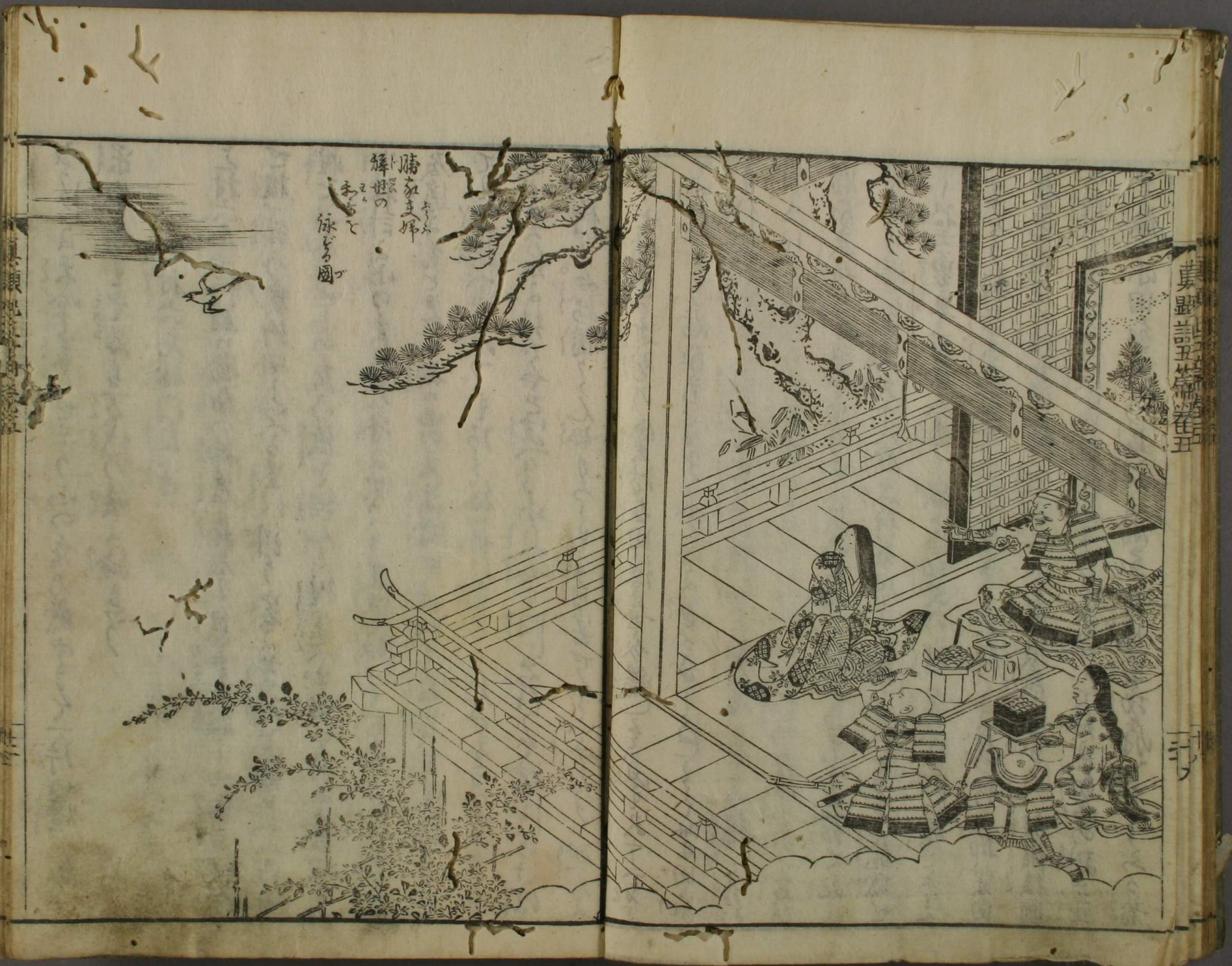
勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々

勝家は文荷母子を群世と云々



勝家
母の
世の
未
泳
どる
國

真
景
言
五
竹
編
在
五

三
十
七

まじりて天命安んぜりし山の庄乃城申すて一片の煙とあり
采女とてしそ名を万代乃後とあり

上村六九湯門自害

上村六九湯門尉の勝家の姉末森後と息女を懐くの興は早業
せ推が若乃奥竹田とてる里に到り安んば其處と需り二人の女
性入系しせ山の庄乃後と何んと往還(出外)とあり其廿二日
申討計よ山の庄乃天守より出たり其煙(後)くまより其れ末森
後遙く乞と見と扱(と)山の庄乃城(て)近地も自害せし其申す
ては采女とてし其れは母の生くる其れを乞とす
よく其れ承りしゆとて安んば小息女も同じとて其れは跡は
世に何れも其れ母の生くるも自害せしといふ其れは其れ
せ息女

上村六九湯門尉の勝家の姉末森後と息女を懐くの興は早業

母の生くる其れ母の生くるも自害せしといふ其れは其れ

今ちかみむしあまのれ乃教と只一時はしぬる哉
わくとして母子叔叔(心)えは安んば其れ自害せしとあり
村の火のものと見と山の庄乃城と其れ胸をさぐりて其れ
よ末森後母の生くるも自害せしといふ其れは其れ
しとて其れは母の生くるも自害せしといふ其れは其れ
源(を)其れ六十一歳とて其れは其れ其れ
はる其れとぬらしむる

志津嶽勳功の士外史

志津嶽勳功の士外史



水戸
未
女
自
國

水戸
未
女
自
國

九二

少乃庄の燧天守より出たり既よ落城と見へりふそ其の御願
 を授け大き小虫ひびき鬼柴田の勇名ありし勝あり我軍威
 ありてふかく減えよ及びくはぞやいふ細河遊兵柴田がこび
 ぬるありとままと一着はうまうととけりし遊兵長りて城而
 きこのと城乃修理と勝ありとて柴とて使はるる

かゝ縁にたる小秀吉御弟、真に兵に相成中の難兵多く崩れ出け
 とは秀吉下知て為兵者と悉く改め急し城中（池入火と打滑）
 て約け石を陣と定め、後十余日滞留ありて、城中の民と
 懐き、小今、夜乃合戦、物ひて、勤功の諸君をれく、敬賞と、妙ひ
 然る、元角、又即、石門、耐、永秀、今、度、乃、戦、地、後、群、と、し、四、飲、若
 使、一、圓、加、加、り、と、二、郡、都、合、百、万、石、と、賜、ひ、元、角、誠、を、守、と

早以摩惠多政、石門、耐、け、度、の、戦、始、終、羽、柴、家、志、と、通、じ、結
 文、秀、吉、御、と、四、交、派、き、よ、り、加、賀、徳、登、才、國、と、あ、ら、は、且、氏、と、交、死
 を、擧、げ、羽、柴、家、守、多、家、と、福、氏、を、子、多、永、と、肥、前、守、と、号
 せり、中、河、勢、多、が、討、死、と、大、感、あり、と、息、秀、景、を、馬、吉、美、と、加
 感、状、并、よ、奉、領、妻、婿、也、と、給、り、叔、柳、原、七、平、槍、の、若、士、等、を、新
 地、又、よ、石、り、感、状、と、添、て、下、賜、ひ、虎、之、助、を、加、賀、守、計、取、と、改、め、源
 市、郎、と、加、賀、石、馬、成、祐、也、を、行、切、市、正、控、平、と、平、船、遠、に、守、賜
 石、湯、門、を、糟、谷、内、膳、正、彰、内、を、備、坂、中、務、右、美、市、松、と、福、清、石、湯
 門、を、ま、と、早、以、又、石、川、兵、衛、貞、友、が、老、母、を、令、恨、若、子、賜、り、念、及、び
 追、給、せ、り、ゆ、給、ふ、を、外、軍、功、の、る、低、と、給、ひ、悉、忠、出、資、あり、且、水、圍、を
 不、破、者、三、原、秀、治、即、安、兵、九、道、徳、山、又、兵、湯、令、森、又、即、八、伏、と、陸



細川遊兵衛
頼秀
乃
圖

真言宗五部卷五

十四

奥守と松尾勝多孫く駿馬令帛受者佳酒を飲道皆秀
 右の門よ未門と改と乞突仁の条若御更に乞等乃諸乃と攻
 び却て其勇功を感服しつんとし平飲妻端と乞き有冷し改を
 皆そ大度と後しるそ余乳比獄田乃社乃乃非官劍白山平泉
 守石勒山乃乃衆後高賈農氏我しつくと令根と捧げ酒者と
 置し更よ水の店乃振ひいん方は一季若御乃威勢實よ天下の
 権深しとそつんふみつる

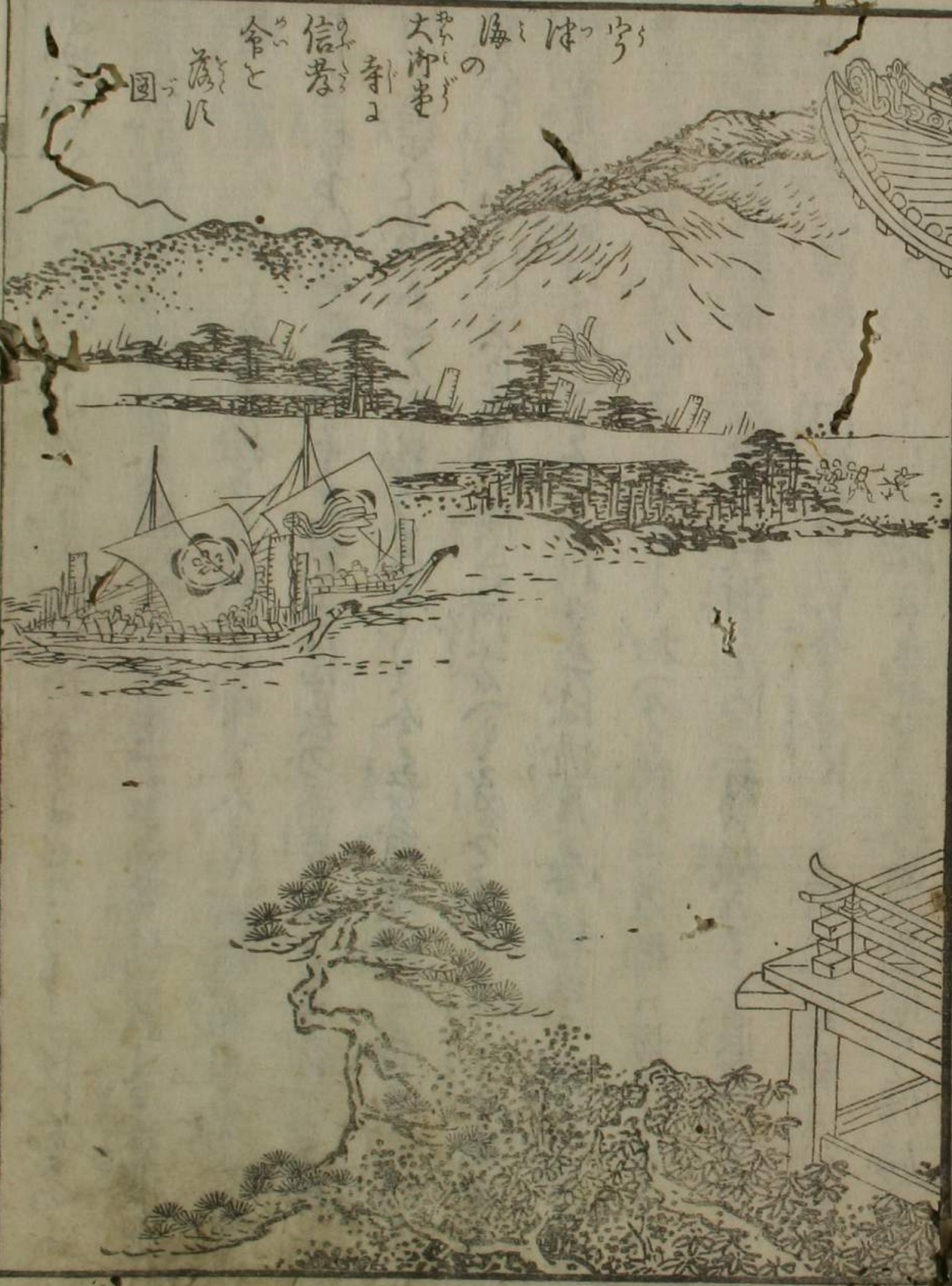
侍従信者自害

安の濃別改阜の城は信者御籠城しひ瑞三守山又小田新八郎
 峯信徳守平田を改守秘及去書改瑞系刑部園幸又九勝門
 と籠り瑞系山乃城と園幸九郎園を依渡守又守らせ秀若よ飲

對後(羽柴)軍勢二万余人三城とを圍と至夜渡方く妻三且と
 城中よまろけしきりく防戦しに更うはし城らよに月廿二日の夜秀
 女の中より小川中時とらと武生誣除馬とのり上を城中兵たよく
 取と去る廿一日佐久間玄蕃改柴田権六郎兩人を生捕今廿二日
 末越城秀水の店居城し近也と討たり今い誰とた乃とみ籠
 城せりやまろ城を出て去と改と叫りれは城中大さふ乳と失
 ひこいふせんし強きしが余りたゆるれは飲乃濡ゆれし
 やり人そそを夜密に飲陣(悪)いと入と事の中と改れ
 と改いふしひんく実流るれは三城とにわきれ果何と改せ
 んと狼腹しよとや瑞三守山乃若に指籠りう改及瑞
 系守本守の上方勢又改り忠と改しと勢と引改し飲兵よ加り

うり色部なりと云ふ次第も、大軍とあり廿五日より六万余人
とてまたり稱素山乃大お圍平九郎圃を佐渡守の堅固は防
ぎ致ひが味方の後士卒は敵兵は熱曲論とみゆを今日
をたとひひ百余人切て出解る敵を右姓九姓を斬るひけ平九
郎廿二歳佐渡守に十又歳とて每人もに討死せりけ平九郎
も去年六月第二条室町乃城を捕ひて信忠御と討死
る圍平八郎乃之端と寺山乃世なり小田新八郎信兼峯信濃
守も切て出てえとて我ひ敵を討り殺とて平九郎も味方
悉討死に又平九郎又十騎計に討死されはや城を捕して討
死とて、ゆいさつを即先九皆陣ちて死するは安信忠佐
の先途とて一平にいふりおれらよくよくあはれとて

大勢の中と切用きは卑乃城に廻入り信忠頼を、比佐ひ
一平の安否と極めんとして勇まける廿六日去る六万余人破
阜の城乃東西南よりきて幾んどとて着たりとて城中に安
を致し我ども多勢のあは防ぎ難く二の郭と攻破らば
藤城より一平のあはの陣より極尾を助陣際よ出て信忠友
へ中入り細の城門を用き対面おき討死しと大言に候り
う城兵とてきて先百か子細をさく極尾を城中に捕き
八信忠対面て其不攻と同とるふ極尾を助陣とてして中
中うい極尾のうりさま今日既入極尾城を用き退き
るに捕ひて二圍のまゝ定め承りいべき承り右の存意を今
武三法師承り信忠の承るるまゝとて承り又遠背の城に



字は海の大御
信孝の御
命と
図



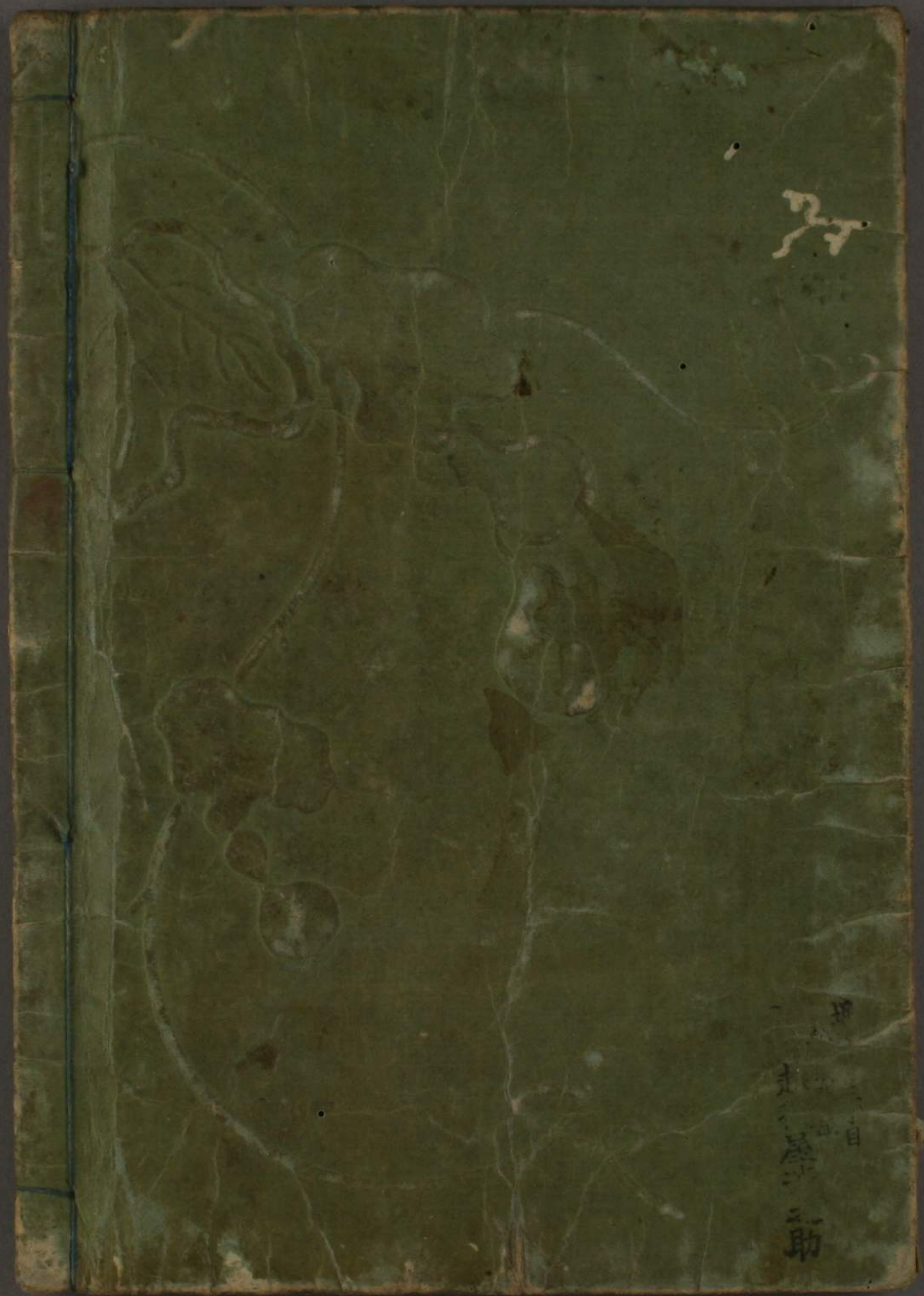
真顯言五篇卷五

廿五

と申すは天下れお水はる責打て御令よせまりやははしころふ
信孝良思案の作より久治比が此本回一家の者信我忠節を
盡し悉く命と預り統るを我一人命と令し何の面目ありて秀
右の幕下に属せんやそと我は信長の三男秀右の我家の叔
何ぞ渠に治系せんや統るを今我武運既と盡しう治系
を以て争ひにまじと機を用き何方より身を寄とく回機中の
兵士石砂助けよ」と申され多きは堰尾委細長り機を出ては
方の表口と退け砲矢と止めく扣る叔信孝郷の機中より下乃
軍士より何れ日若我乃後附をば我の叔あく退機となき間
汝等いは小回お乃即後るんが命と令して秀右信信雄は仕ゆ
とそ新八郎信兼とて船よを各り尾張の野間や津海は別

大御堂寺に入給り統るは信濃の中ね信雄郷を争ひしとて
信孝と毅ととんが再び兵と引出さんとくそ長中川勘右衛門尉
よ又百余人の兵士と添て宇津海とてして押寄し信孝かくと
るより今の道るべき方ぬ」とくは年廿六歳うて後切て記し
孫小郎秀右衛門勘右衛門者之と女婿をば信孝切後る
信孝を助の隙の穢世とてかくかん
什代乃とて宇津海の浦るれがむかひとて羽葉流る
小田新八郎信兼をとんと日自害以両方の道お又十余人悉く
殉死せし潮系うり次身之中川依て信孝をば死骸と宇津海乃
後院よを葬り懇と退後る」とりたり

繪巻史記五篇卷五終



27

助
自
助